

「手書き認識機能」を活用する



(q) (q)は、最初の **書** の右上に **ニ** という部分がありますが、これは、前の字の「ニ」です。

さて、**書** は、「事」か「書」(「重」に見える方もいるかもしれませんが)に見えると思いますが、第32回で **書** と出てきていますから、これは「書」です。難しいのは、次の **載** の部分です。この部分には2文字あり、後の字は「セ」だとわかります。

載 の前の字は、見当がつかないと思います。まず、注意してほしいのは、起筆が **ニ** となっていることです。そして、この字は **弋** のようなパーツを含んだ字であり、「或」のように **弋** というパーツを含んだ字ではないということです。 **弋** のようなパーツを含

む字は、「貳(弍)」「武」なども思い浮かびますが、いずれも **弋** であって、 **弋** ではありません。どうやら **弋** という感じの字はないようです。こういうときには、第25回でも少し触れましたが、ワープロソフトの「手書き認識」機能を使うと便利です。「手書き認識」機能でこの字を書いてみると、「哉」「裁」「載」なども候補であることがわかります。

これらのうち、送りがなの「せ」と合うのは「載せ」くらいしかありません。その前の **書** と組み合わせて「書載せ」なら、意味も通ります。

次の **可** は、一文字に見えないかもしれません。第28回で **可** と出てきた字なのですが、「可」という字です。次の **遣** は初めて出てきますが、「遣」という字です。これは頻出する言葉で、しかも今回の字は、典型的な「遣」ですから、ここで覚えてしまってください。したがって、(q)の所は、「書載せ可遣」(かきのせつかわすべし)となります。

なお、手書き認識機能は古文書を読むためには便利ですが、 **弋** というパーツを含む字にはどんな字があるかな、と考えて、正解に行き着くところにこそ、くずし字を読む魅力があると思います。

史料(前略)右墨付或者紙生地等有之跡宿より申継候趣、持夫之者より申聞候八、其段請取書江書入、尚又、先宿江右汚等之場所、跡宿より申継之趣、急度差状ニ(q)(r)(s)之通可取斗、併御取扱之節、
万一(t)、不調法等(u)、差状ニ無之上者、(以下略)